
喫茶店の出来事

石子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喫茶店の出来事

【Nコード】

N6922I

【作者名】

石子

【あらすじ】

僕の働いている喫茶店にやってきた男性客。彼は自分には不思議な能力があると語りはじめた。

僕が働いている小さな喫茶店は、都心のビルの片隅にあった。

「俺には不思議な能力があつてさ」

中年の男性客がカウンター越しに、そんな風に僕に声を掛けてきた。ちょうど僕一人で店番をしている時だ。

面食らったが、そんなそぶりは見せずに顔を上げる。

うちの喫茶店は早朝まで営業しているが、アルコールは置いてない。

男性は酔っ払っているようには見えなかったが、夜も遅い時間だ。どこかで飲んでからこの店に来たのかもしれない。

「どんな能力なんですか？」

僕が話に乗って、そう問い掛けると、男性は待ってましたとばかりに勢いづいて話し始める。

「俺はね、他人の願いを叶えることができるんだ！　どんな願いでもね！」

声が大きくなってきた。

他にお客さんがいなくてよかった。

「どんな願いでも、って……。そんなことがホントにできるならいいですよねえ。僕もお願ひしたいくらいですよ」

「ただし、条件付きだがね」

男性は、急に声のトーンを落とす。

「はあ……」

変な宗教の勧誘とかだったら嫌だなあ。

「願いを言う本人の命と引き換えに、っていう条件でね。だから、まだ実際に願いを叶えた人数はしれてるんだ」

……宗教よりもたちが悪い気が……。

「でも、それなら『長生きしたい』とかいう願いは……？」

「必然的に却下だね」

即答された。

どんな願いでも、って言ってたばかりなのになあ。

僕がこっそりそう思ったのが伝わってしまったのかどうか、男性客はすぐに言い直した。

「まあ、自分が長く生きたいっていう願い以外ならどんなことでも叶えられるってことだよ」

なるほど。でも、

「他人の願いを叶えて……、お客さんにはなにかメリットはあるんですか？」

「そこなんだよ。この能力に気付いたのは、まだ俺が子どもだった頃なんだけどさ。それからいろいろ考えてみたんだ。なんとか金儲けとかに使えないかってね。でもどうにもうまくいかない。なにしろ願いが叶えば依頼人が死んじゃうわけだろう？　こんな胡散臭い話に前払いしてくれる奴なんてそういない。当人に保険を掛けて、死んだら俺に保険金が入ってくるとか……そんな契約もちかけても怪しまれるだけだろう？」

男性は冗談めかしてそう語った。

言われて、もし僕が依頼をする立場だったらどうだろうと考えてみる。……確かに、全然信用できない。保険金なんて掛けられたら、それこそ騙されて自分が殺されそうで怖すぎる。

「そうですね。命と引き換えっていう条件はちよつとやそつこのことでは決心できないでしょうしね」

「そうなんだ。でも一度、たまたま出会った老人に不治の病にかかった孫を元気にしてやってくれて頼まれてさあ。叶えてあげたんだよ。俺もやっぱり気になるからその孫が入院してた病院に様子見に行ったりしちゃったんだけどさ。元気に遊んでるのを見た時は気分よかったなあ。だけど、その時にはもう老人は亡くなってたんだよ。命と引き換えに願いを叶えたんだから当然なんだけどさ。そ

の時は老人から事前にいくらかの謝礼をもらったんだけど、……俺の能力は金儲けには向いてないと改めて思ったわけだよ」

男性はそう言い終わると、一呼吸置いて僕ににやりと笑みを投げる。

「……なーんていう話、君は信じる？」

あれ？　なんだ、からかわれただけか……。

でもおもしろい話だったし嫌な感じはしなかった。最初はただ胡散臭いだけだったけど。

「そうですね。ちょっと信じてもいいかなって思います」

男性は、僕のその答えに笑みを返すと、またコーヒーを飲み始めた。

その後は男性の不思議な能力の話は出ず、別の他愛ない事をたまに話しながら夜が更けていった。

店のドアが乱暴に開けられたのは、深夜のことだった。

店のお客さんは相変わらず先程の男性客だけだ。

ドアを開けて入って来た一人の若い男は、驚いたことに拳銃のようなものをこちらに向かって突き付けてきた！

「お前等、動くなよ！　妙な動きするんじゃないぞ！」

いきなりの事に何が起こっているのか瞬時にはわからなかった。まさか強盗？

こんな金めの物がなさそうな喫茶店に？

若い男は、まず男性客に銃口を向ける。

「いいか。警察の奴らがここに来ても、誰も来てないって言えよ！　余計な事言くと撃つからな！」

男性客は驚きながらも、「わかった。言う通りにするよ」と答える。

僕もなるべく冷静にと思いながら声をかけた。

「そちらの言うことは聞きますから、危害を加えないでください」

若い男は、今度は僕の方に銃口を向けてカウンターを乗り越えようと外からは見えないうちに中にしゃがみ込んだ。

緊張した空気が流れる。

あまり時間を置かずに再び店のドアが開けられた。

入って来たのは目つきのするどい数名の男だ。

「ちょっと失礼します。ここにこんな男が来ませんでしたか？」

言ってみせられた写真には、もちろんというか今まさにカウンターの下に隠れている若い男の姿が写っていた。

「いえ。誰も来てませんよ。客は俺だけですしね」

男性客が答えた。

「その男がどうかしたんですか？」

聞かないのも不自然だと思って僕は男の一人に尋ねる。

「銀行強盗一味の一人です。この辺りに逃げ込んだようなので捜索中なんです。もし何かあれば連絡ください」

そう言って連絡先の書かれた指名手配犯のポスターを置き、軽く店内を見渡しただけで男達は慌しく出て行った。

銀行強盗だなんて聞かされて僕は気が気ではなかったのだが、男性客は見た目は落ち着いたものだ。

強盗犯は拳銃を握り締めたまま息を潜めてしゃがみこんでいた。「そろそろ出て行ってもいいんじゃないかな？　いつまでもここにいるわけにいかないだろう？」

世間話でもするかのように、男性客がカウンターの中の若い男に声を掛けた。

「うるさい！　余計なこと言うんじゃない！」

ぱっと立ち上がって男性客に銃を突き出しながら、先ほどとは逆にカウンターを乗り越えて外側に出る。

若い男は少し迷ったようだが、そのままドアの方に向かった。

「いいか。通報なんてするんじゃないぞ！　そんなことしたらこの店どうなるかわかってるだろうな！」

そんな捨て台詞を吐いてドアの外の様子をちょっと窺ったあと、

その男は店を出て行った。

緊張感から開放されて安堵のため息をつく。

「店のドア、しばらく鍵閉めたほうがいいでしょうか？　また戻ってきたら困るし」

僕はまだそわそわしながら提案してみた。

もし気が変わって、店に戻ってきて人質にでもとられたら……って、考えすぎじゃないはずだ。

しかし、男性客はそれを制してカップに残っていたコーヒーを飲み干すと椅子から立ち上がった。

「大丈夫だよ。強盗犯の彼も余裕がなさそうだったから、逃げるのに必死で戻って来たりはしないだろう。それに俺もそろそろ帰るよ」

「まだ外にいるかもしれないですよ」

「まあ、その時はその時だ。そうだな。俺が帰れば今日は店を閉めたほうがいいかもしれないね」

男性客の言葉に僕はうなづく。

「そうします。お客さんも気をつけてお帰りになってくださいね」

男性客は軽く片手を挙げてそれに答えると、会計を済ませて店を出て行った。

「今日は君と話せてよかったよ」

出て行く前に、僕にそんな風に声を掛けてくれたことが印象に残った。

それからその男性客は一度も店には来ていない。

ただ、あの日店に押し入ってきた強盗犯の若い男は逃亡中に心臓発作を起こして亡くなったということを聞いた。どうやらこの店を出てすぐ後のことだったらしく、なんとなく後味が悪い。

しばらくは警察の人がうちも含めて近くの店等に事情聴取に通っていたようだが、客商売でもあるし当日は何も変わったことはなかったと言いつつ通した。まあ、当人が亡くなっていることもあり聴取自

体もおざなりな感じだったので、特に揉める事なく日々は平凡に過ぎていく。

それでもたまに思い出すたびに気になることがある。

「誰も来ていないと言え」という強盗犯の『願いを叶えた』男性客。

それが命と引き換えだった、なんてことはないよなあ……なんてね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6922i/>

喫茶店の出来事

2010年10月8日15時26分発行